

## 「年金生活30年の今昔物語」

岡本 孝哉（岡山県職OB）

格調高い専門誌に又もや馬鹿話を投稿したので、笑覧ください。

昭和54年に県を退職して30有余年、88歳（数え年）となり、先般、子供達が米寿の祝いをしてくれ、よくぞ今日まで生き延びたことを感謝しています。

私たち大正年代に生まれた者は、戦前、戦中、戦後の激動の時代を生き抜き、贅沢は敵だと、質実儉約を旨とし「ほしがりません勝つまでは」を合い言葉に、国のためにと生活し、若い男性は親子、妻子、兄弟を捨てて戦地へ行き、若い生命を国のために捧げ、生き残った者は戦後の荒廃した祖国の復興に尽くし、現在の物資豊かな平和な国に作り上げた基礎作りを行い、当時の苦しい時代を思えば夢のようです。一粒の米粒でも残せば眼がつぶれると叱られ、何事も勿体ないで過ごし、蚤の金玉を八つ裂きにするような気持ちで生活した関係で、今でもこの言葉が身体に染みこんでおり、今時の若い人には想像もつかない事と思います。

ここで、私の近況を少し入れます。一昨年妻を天国に送って二年のこの間の寂しさ、悲しさを体得し、漸く忘れかけていますが、時にふれて想い出すこともあります。一人暮らし生活にも漸く馴れ、我が家の家伝オリジナル猫マタギ料理も作れるようになりました。残り少ない人生の集大成として、ツマラン父親の生き様を子に孫に伝えておこうと思い、遅まきながら、自分史の作製を思いつき、先般、一年余りかけて「戦病死確実の軍隊編」を完了し、引き続き、中国大陸の戦地から復員、現在までの生き様を戦後編として、作製中ですが、年齢の関係で失念していることが多く、

加えて年を重ねるごとに脳細胞が萎縮減少し、脳減症(のうへるしょう)となり、思うように進んでいません。この先少ない人生をどう生きるか。私は生き甲斐として、障害者共同作業所の支援ワーカーとして、週三日行き、相談事や話し相手となっています。家にあっては、時々、庭の草取り、手入れ、数百鉢の植物の鉢の植林（盆栽）の管理をしています。何時まで続くことやら。又日課としてストレス解消として喫茶店でコーヒー、新聞を楽しみにしていますが、これも自動車運転ができるまでのことです。夕食後は話し相手がなく、新聞の切り抜き、日誌、血圧測定で一日が終了。後は寝の刻、底の刻です。天国行きの通行手形も未だ戴けず、心待ちにするも、これだけはどうも。限界集落の田舎暮らし。やがて買い物難民、介護難民となることは覚悟の上です。

学校同窓会、戦友会も段々と解散し、淋しい限りですが一期一会を大切に、私なりに精一杯生きて行く所存です。皆様のご多幸を念じつつ失礼します。